

川妻一色神社の由来

元和五年（一六一九年）武蔵国幸手城主一色宮内大輔直げんな

朝公は、関宿城主、小笠原左衛門信政公に攻め落とされてくないたいふなお

しまいました。

そこで、幸手城主の二男、一色次郎輝季公は、この怨みじろうてるすえ

を晴らそうと、名を庄右衛門法吉と改め、姿を変えて、こしょううえもんりのよし

こ川妻村に隠れ住み、チャンスが来るのを待っていたので
した。

翌元和六年（一六二〇年）に利根川が大氾濫をし、農作はんらん
物が取れなくなり、村人は大変困ってしまいました。

輝季公はこれを見て、利根川を下る関宿藩の年貢米を満ねんぐまい
載にした御用船を奪い、川妻の村人を救ったと伝えられて
います。村人たちは大変感謝しましたが、関宿城主は大い
に怒り、厳令を下して輝季公を捕えようとなりました。げんれい

しかし、人並みはずれて武術に優れていた輝季公は、な
かなか捕まえられませんでした。その時、栗橋宿に住む

萬屋吾郎兵衛よろずやごろうべえが関宿城主にうまく言いくるめられ、輝季公が遊びに来たことを通報し、丁度囲碁を打っていた時、輝季公は召し捕られ、麻縄あさなわで縛られてしまいました。

翌元和七年（一六二一年）十月十五日、輝季公は利根川の河原で処刑され、川に流されましたが、川妻地先に流れ着き、いつまでも離れなかったそうです。

村人は、関宿城主の怒りを恐れながらも、輝季公を川妻村宿北地区しゆくきたの杉の木ほうむの根元に葬りました。そして杉の木をご神木として、木の根元に小さな社やしらを建てて、この地の守り神として祀まつられたと伝えられています。

毎年、四月十五日、十一月十五日には、麻を奉納し、五穀ごこく豊穰ほうじょうと家内安全を祈って、祭礼を行っています。

平成二十九年三月

五霞町教育委員会